

ブルデュー受容から社会学理論の構想へ —近年のイギリス社会学における差異と不平等をめぐる議論から—

大阪市立大学 磯 直樹

1. 目的

社会学の歴史において社会分化と社会統合は古典的な研究対象であるが、本報告ではこれらの2つの問題を同時に扱う社会学思想としてブルデューの業績を捉え、その新たな可能性を近年のイギリス社会学におけるブルデュー受容を通じて考察する。ブルデューが『ディスタクシオン』で提起した問題、すなわち、経済中心主義（拝金主義と経済合理性）以外のいかなる原理によって社会が分割されつつも統合されているのかという問いを、現代イギリス社会とブルデュー社会学の関係から考えるのが本報告の目的である。

2. 近年のイギリスにおけるブルデュー受容

90年代まで、イギリスにおけるブルデュー受容の水準は決して高くなかった。しかしながら、2000年代に入るとその水準は急激に上がり、フランス社会に固有の文脈と特性を相対化しながらブルデュー社会学の可能性を拓く研究が次々に出てくるようになった。また、イギリスに固有の文脈からブルデューの社会学理論が批判的に検討され、ジェンダー、エスニシティ、年齢などに関する分析を理論的・経験的に取り込んだ研究成果が出されている[Bennett et al. 2009, Reay et al. 2005]。さらに、2012年にはBBCの協力の下、ブルデューの影響を強く受けた理論枠組みと調査手法によって、「階級」に関する全国調査が Mike Savage を中心に実施された(The Great British Class Survey)。これは、従来主流であったゴールドソープ派の階級分析に取って代わろうとしている。このようなブルデュー受容の状況から、（フランス以外では）イギリスのみで、ブルデュー社会学に依拠しながらフランスと比較するための十分な先行研究と統計データが既に蓄積されているといえる。

3. ブルデューの国家論

一方で、イギリスにおけるブルデュー受容においてはまだ十分に検討されていないのが、ブルデューの国家論である。すなわち、政治社会学と教育社会学を国家論の枠組みから統合する試みである『国家貴族』(Bourdieu 1989)、及び昨年公刊されたばかりの1989年から1992年にかけてのコレージュ・ド・フランス講義録『国家論』(Bourdieu 2012)を中心とした国家に関する一連の考察である。イギリスにおけるブルデュー社会学の受容の理論的側面に着目しつつ、それとブルデューの国家論がどのように関わるのかをここでは考察する。

4. 英仏比較研究の可能性——結びに代えて

ブルデューは理論的考察を経験的研究の中に位置づけることで独自の社会学理論を構想していったが、近年のイギリス社会学におけるブルデュー受容にもこのような特徴が見られる。イギリス社会の諸事例を通じてブルデュー社会学を批判的に検討し、社会分化と社会統合の社会学理論を精練させていくことで、フランスにおけるブルデュー受容にも新たな視座を提供することができる。さらに、ブルデュー社会学を基点にした英仏比較研究を通じ、社会分化と社会統合を同時に考察するための社会学理論を精練させていくことが可能になる。このような理論研究は、英仏以外の諸地域、例えば日本社会の分析にも有益な視座を提供してくれるはずである。

【文献】

Atkinson, Will et al., 2012, *Class Inequality in Austerity Britain : power, difference and suffering*, Basingstoke : Palgrave Macmillan. Bennett, Tony et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, Routledge. Reay, Diane et al., 2011, *White Middle-Class Identities and Urban Schooling*, Basingstoke : Palgrave Macmillan.